キラリ★話題の「ひと」

大関 玲子（れいこ）さん
（田沼町）

○プロフィール
佐野市あそ商工会女性部部長
池坊宝生流華道教授
佐野市民合唱団Voice団員
日本女性会議２０１９さの運営委員
株式会社さんだい常務取締役

新しい生活様式に添った活動へ

お義母さまからあそ商工会女性部部員を引継いだ大関さんは、一昨年から部長を務めています。「昨年は栃木県商工会女性部主張発表大会で、発表の機会を与えていただいたことに大変感謝しています」とのことです。そこで、栃木県代表となった主張の一部をご紹介いたします。

「葛生と田沼が合併した『佐野市あそ商工会』の女性部の会員は約60人です。くずう原人まつり・たぬまふるさと祭り・どまんなかフェスタへの出店、あそヘルホスさんへの訪問、お正月の生け花教室、メディカルアロマ体験、葛生の郷土料理『耳うどん』作りなどの活動を行っています。この二つの町が合併後も互いに協力して活動できるのは、当時の部長や部員たちの並々ならぬ努力や工夫があったからだと、当時の役員さんから教えていただきました。

商売を営む中で、夫や子どもたちを支え、慌ただしい日々を送る部員たちに、もっといつくしむ時間を持ち、自身を磨き、笑顔で輝けるような活動ができないかという思いから、研修や講習会に力を入れてきました。地道な活動かもしれませんが、回数を重ね、仲間と共に成長することで、輝く女性になっていくチャンスを提案できるような女性部でありたいと思っています」（一部抜粋）

お祭りでのかき氷やチヂミなどの販売は大好評ですが、昨年はコロナ禍で開催されず、また今年も未定とのことです。また、あそヘルホス訪問は、部員がフラダンス、日本舞踊、合唱を披露。歌うことが大好きな大関さんも参加し、入居者の皆さんとの交流を楽しんだそうです。各体験などは部員が講師となり開催され、部員同士の絆がよりいっそう深まっていくようですね。

「コロナ禍で今後の活動は未定ですが、一日も早く収束し、新しい生活様式に添った部の活動ができることを願っています」と笑顔でお話ししてくださいました。

今まで以上に、大関部長のご活躍と『あそ商工会女性部』の活動に注目したいです。

（市民記者　中里聖子）

市長からのメッセージ

1月13日に栃木県にも追加発令された新型コロナウイルス感染症の緊急事態宣言が2月8日に本県のみ解除となりました。しかしながら、県内の逼迫（ひっぱく）する医療体制など、いまだ予断を許さない状況にあり、本市でも宣言解除後も感染防止対策の継続をお願いしております。

これまでも、感染拡大防止に向け学校や施設などに対し、迅速な消毒や市独自の検査など実施してきましたが、今後の対策として市立小中義務教育学校の全児童・生徒に対する手指消毒用スプレーの配布や各学校の水道の蛇口への次世代光触媒コーティングの実施、さらには各教室への二酸化炭素測定器の配備を予定しているほか、高齢者・障がい者施設に対しても酸素濃度測定器の早期配布を検討しています。

また、今春実施予定のワクチン接種ですが、現在、佐野市医師会と詳細を協議中で、集団接種とかかりつけ医での個別接種の二つの方法での接種を考えています。

今後も市民の皆さんの安心と安全のため、感染予防対策の徹底を市を挙げて図ってまいります。

ここで明るい話題を一つ。本市出身の川島勝司さんが1月14日、野球殿堂入りをされました。これは日本野球界の発展に大きく貢献した方の功績を顕彰するもので、野球人の最上級の栄誉といわれます。川島さんは天明小で野球を始め、城東中を経て高校、大学、そして社会人野球で選手・監督として活躍。1996年アトランタ五輪では、野球日本代表監督として銀メダル獲得に導いた名将で、このたびの野球殿堂入りは佐野市としても大変誇らしいことです。現在、静岡県にお住まいですが、コロナ収束後にぜひとも佐野市での凱旋報告を期待しています。

3月になってもまだまだ寒さが続きます。コロナの早期収束に向け、もう一度感染防止に向けた取り組みを徹底しましょう。

（2月9日　記）

岡部正英

今回の表紙　「バルーンリリース」　令和3年2月4日撮影　卒業を迎える子どもたちが未来に向かって羽ばたけるように市立小中義務教育学校で実施されました。夢を乗せたバルーンが空高く舞い上がる様子を子どもたちは歓声をあげて見上げていました。

※市のフェイスブックでも、市内のイベントなどの様子をお知らせしています。ぜひ、ご覧ください！

厚生労働大臣表彰の受賞報告

健康サポートさのの本島清子会長が、今年度の栄養関係功労者厚生労働大臣表彰を受賞しました。この表彰は、永年にわたり食生活の改善活動を積極的に推進し、特に顕著な功績があった人を表彰するものです。

健康サポートさのとは、地域において健康づくりを支援しているボランティア団体です。現在の会員数は１８５人で、市内９支部に分かれ、活動しています。本島さんは２０年以上継続して食生活の改善を推進しており、支部活動では「高血圧予防教室」や「おやこの食育教室」「生涯骨太クッキング」など、さまざまな世代に向けて広く支援をしています。

このたびの受賞、誠におめでとうございます。

復旧に向けて

戸室町の運動公園、グリーンスポーツセンターには、令和元年１０月の台風１９号の被害の際に排出されたたくさんの汚泥や残土が蓄積され、草が生い茂り見事な小高い丘のようになっていました。

徐々にテニスコートなどが使えるようになっても、致し方ないことですが、運動場として使えない一面がありました。にぎやかに野球を楽しむ子どもたち、ゲートボールをする高齢者の姿もなく、台風の爪痕を感じつつ、寂しく残念に思っていました。

コロナ禍の中で、余暇で運動を楽しむこともままならない今ですが、確実に復旧は進み、皆さんが待ち望む運動場も、もう間もなく使えるようになることでしょう。

（市民記者　葛貫郁子）

佐野弁 ばんざい

欲が深く出し惜しみする人をケツッツマリという

世間には金銭を出ししぶったり、物を貸したり与えたりすることを惜しむ人がいます。一方、金銭や物にはそんなに執着しない人もいます。金品などを出ししぶる人を、共通語では、普通けちんぼ（う）とか握屋などといいます。方言にも、シア（ヤ）ンボ・シア（ヤ）ッケツ・シミ（ビ）ッタレ・ヨクツカキ・ヨクッタカリなどいろいろあります。

金銭や物を、気前よくぱっぱと使ったり出したりする人がいますが、このような人を、方言で〝オッキリ（レ）ガイー〟といいます。オッキリガイーは、刃物の切れ味がいいを比喩的に表現したものです。

「コナイダ（この間）老人会の人たちが1泊2日で温泉旅行に行ったんだってねえ。そンとき、あンたのご主人がみんなにジュースやお菓子などをおごってくれたんだってねえ。ご主人は気前がいいっていうか、お金持ちっていうか、ほんとに、オッキリガイー方なんだね」（ある老婦人の話）

出し惜しみする人は、度量がせまく、尻穴が小さいといわれています。もったいないからといって、大便さえも排泄しようとしない欲深い人を、ケツッツマリといいます。

「あの人は、ヒトンチ（他人）の酒は飲むくせに、ジブンチ（自分の家）の酒は、ヨソンチ（隣近所）の人には、これっちンペも出さネンだってよ。ケツッツマリなんだねえ」

（市民記者　森下喜一）